

外国語・外国語活動部会

英語によるコミュニケーションを高める授業づくり

■研究内容

- ・コミュニケーション力を高める目的・場面等の研究
- ・ねらいに迫るための1人1台端末を活用した実践研究

■研究成果

- ・他学年やALT、他校、外国とオンラインで交流し、英語でのコミュニケーションを行う場面を計画的に設定することで、伝え合おうとする主体性を高めることができた。
- ・「リアクションカード」を活用し、相手意識を高め、「やり取り」の活動幅を広げることができた。
- ・買い物や物の交換、道案内、スピーチの単元等において市内共有フォルダで共有しているデジタル教材を積極的に活用し授業を進めることに取り組み、教員の負担軽減にもつなげることができた。



特別活動部会

ICTを活用した学級活動(1)の充実と学級活動(2)での活用

■研究内容

- ・学級活動(1)におけるICTの効果的な活用方法の拡充
- ・ICTを活用した学級活動(2)の実践

■研究成果

- ・話合いの中で、Jamboardを活用することで、一人一人の考えを学級全体の話合いに反映させることができた。
- ・それぞれの意見をJamboardに書き出しながらグループで話合いを進めたことで、それぞれの意見が整理され、多様な意見を取り上げながら話し合うことができた。
- ・事後の活動では、ワークシートを班で共有できるようにしたことで、互いのがんばりを認め合ったり、励まし合ったりしながら、実践することができた。



ペアトレ・MIM部会

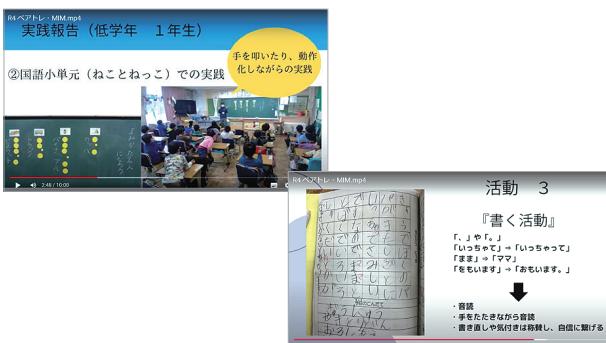
授業内で気軽に行える読みの指導

■研究内容

- ・多層指導モデルMIMを使用した、全ての児童を対象とした授業内で気軽に行える読みの指導について

■研究成果

- ・通常学級の中で、気軽に繰り返し行える読みの指導法をさぐることができた。（第1層支援）
- ・特別支援学級において、第2層、第3層支援を実施することができた。
- ・通常学級における第1層支援だけでは難しい第2層、第3層支援の必要性を実感することができた。今後の実施が課題である。



特別支援教育部会

児童生徒の実態と環境に応じた合理的な支援について

■研究内容

- ・事例検討会における、指導・支援方法の検討
- ・特別支援教育におけるICTの効果的な活用

■研究成果

- ・複数の研究員の多面的な見方から児童生徒の実態を捉えることで、今まで気づかなかった新しい視点に気付くことができたり、注視すべき事項を再確認したりと見解を広げることができた。
- ・事例検討をとおして、効果のあった指導・支援方法を共有することで、自校の児童生徒にも効果的だと思われる方策を検討することができた。
- ・個々のニーズに合わせたICT機器の活用方法を共有し、理解を深めることができた。



PBL・STEAM 部会

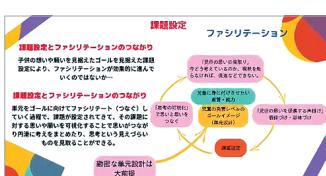
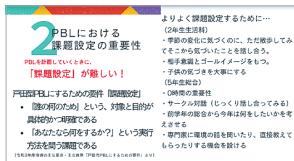
「子供の思いや願いを大切にした 課題設定とファシリテーションのあり方」

■研究内容

- 市内各校のPBLの実践事例及び最先端PBL講師（こたえのない学校 藤原さと 氏、三鷹市立第三小学校 山下徹 氏）の指導を受けながら研究を進めた。

■研究成果

- 効果的な課題設定をするためには、クラスでの話合いを通して気付きや思いの共有を行い、発表や試行する場を設定し見直すことが重要である。
- ファシリテーションにおいては、児童の思いを見取り、促進する声掛けをしていくこと、思考の可視化（板書やICT）をして考えと考えをつなぐことで活動が促進される。その為にカリキュラム・マネジメントと共に児童に身に付けたい資質・能力を明らかにしておくことが前提となる。



ICT・プログラミング教育部会

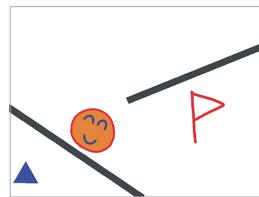
『やってみよう』『広げよう』『深めよう』

■研究内容

- 戸田市版SAMRモデルに基づく実践の共有と分析
 - 新たなプログラミング教材の研究
- (株式会社しくみデザイン社と連携した教材「Springin' Classroom」体験会など)

■研究成果

- 実践共有を通して、新たな単元開発や教材の活用方法について研究が深まった。ICTを教師主導から子供主体とする戸田市版SAMRモデルを意識した実践が広がった。
- 校務のスマート化を意識したICTの利活用や、ICT機器の利活用、プログラミングの小中連携について理解を深めることができた。



リーディングスキル部会

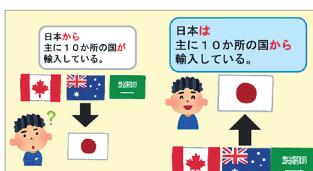
リーディングスキルを育むために

■研究内容

- リーディングスキルの視点を生かした授業研究
- おさえるべき学習用語のピックアップ

■研究成果

- 読みを意識した学習を積み重ねることで、児童自身が言葉に着目し、問い合わせをもち、資料に戻って考える姿が見られるようになった。
- ①児童がつまずきそうな箇所を事前に分析し、それを基に発問する、②児童が試行錯誤できるような授業構成にする、という2つの指導の段階があることが分かった。
- リーディングスキルを高める取組は、児童が自走していくための支援となっていることが見えてきた。



研究結果発表会

センター研究員11グループが10分程度の動画を作成し、本年度の研究のまとめとした。市内共有のGoogleドライブに動画を格納し、いつでも見られるようにしてある。

各小・中学校にて、11研究グループより、2~3部会の動画を選択・視聴し、教職員のディスカッションや、今後の教科指導等について考えを深めた。

